

学生によるスペイン語劇 “Bodas de sangre” の上演を終えて

神奈川大学スペイン語学科2025年度語劇
El grupo Teatro Mágico
presenta
Bodas de Sangre
de Federico García Lorca



“Nadie puede escapar de su destino...”

12月16日(火) 15:30-17:00 (15:00開場)
神奈川大学みなとみらいキャンパス
米田吉盛記念ホール (1階)

協賛: 神奈川大学外国語学部文化ワーク
神奈川大学人文学会

学外の方もご覧いただけます!
こちらからお申し込みください



2025年12月16日(火)、スペイン語学科主催(後援 外国語学部文化ワーク、神奈川大学人文学会)のスペイン語劇が上演され、学内外から一七〇名にのぼる皆さまにご来場いただきました。スペイン語学科では、これまでほぼ隔年で学生によるスペイン語の演劇を実施しています。初

回の上演 (Don Quijote, 2005) から数え、今年で二十周年を迎えることができました。今年度の上演作品 “Bodas de sangre” はスペインの詩人・劇作家のガルシア・ロルカによるもので、日本でも何度も上演されている有名な作品です。キャストの学生たちは、上演に向けてパート練習や通し稽古などを

【参加者たちの声】

S. S. (キャスト/花婿役/3年) novio (花婿) を演じさせていただきました。S. S. です。私は最初、大道具係で参加しようと考えていたのですが、気がついたらなんと novio の役 (男性) をすることになっていました。

実は、稽古が始まる前は「劇の稽古＝修羅場」のイメージがありとても緊張していました。ですが、いざ蓋を開けてみると全くそんなことはありませんでした。アレハンドロ先生もアルトゥーロ先生もいつもニコニコしていて、稽古の度に笑っていた記憶があります。また、この活動を通して、普段なら知り会うことのなかったであろう先輩や後輩との繋がりが出来ましたし、人との絆や充実感を感じる場面が多々ありました。スペイン語の練習や劇を発表するという体験以上に、得るものは多かったと実感しています。多少忙しくはなるかもしれませんが、やってみる価値は十分にありましたので、次の語劇に興味がある方は是非参加してみてください。

ほぼ一年にわたって行いました。その後、舞台美術や字幕、メイク、メディアの担当者たちも徐々に作業に加わり、大学の講堂を見事な舞台に仕上げることができました。語劇参加者たちが生き生きと活躍する様子は、舞台を鑑賞した多くの学生たちにとってとてもよい刺激になったに違いありません。

S. K. (キャスト/レオナルド役/4年)
私は今回で3回目の参加になりました。前回に引き続き、大きな役を演じさせていただきました。多くの時間を使って先生と一緒に発音の練習を行い、場面によって雰囲気や壊れないように、その場に合わせたイントネーションに気を付けながら役を演じられるように練習をしました。

本番ではスペイン語学科の学生をはじめとして、他学部の学生や留学生までもが足を運んでくれました。緊張しながらも一年から四年までの演者、美術班、メディア班、字幕班の全員が最高の作品となるように一丸となりました。本番後のアンケートでは良いコメントが多く、大きな達成感を得ることができました。

スペイン語劇では発音を学べるうえに、授業では触れないスペインの文化や習慣など、作品の時代背景を知ることが出来るのも魅力だと思います。今回の語劇を観て興味が沸いた方は、次回の語劇に参加してみたらどうでしょうか。

A. T. (舞台美術/3年)

一年生の時に鑑賞したスペイン語劇に憧れ、小道具・大道具担当として参加しました。放課後に残り、他チームを含めた仲間たちと一緒に大道具を制作した日々は、とても楽しく充実した時間でした。今回の語劇を通じて多くの人と関わる事ができました。

今年の語劇では、一般的な演劇用の舞台とは異なる会場を使用したため、その空間をどのように



活かすかを考えるのは大変でしたが、試行錯誤する過程も印象に残っています。特にサポテンと木の大道具制作には最も苦労しました。倒れないようにと直前まで何度も調整を重ねました。サンプルを作成し、実際の絵を描いてくれた同チームの二人にはとても感謝しています。素敵なデザインを元に、多くの人の協力を経て組み立てたこの二

つは、私にとって特にお気に入りの大道具です。当日、袖から見た舞台は、私たちのこだわりと

全員の努力を強く実感できるものでした。このような素敵な劇に一員として参加できたことをとても嬉しく思います。

田端さくら (メディア/3年)

私はメディアチームとして参加しました。アレハンドロ先生から劇中の撮影を任せられたものの、これまで一度も一眼レフでの撮影を経験したことがなかったので、初めは上手く動けるか不安でした。

しかし、先生の丁寧なご指導や練習によって徐々に役者さんの動きに合った画角が分かるようになり、本番では納得のいく写真を撮ることができるようになりました。また、当初は私一人しかメンバーがいなかったのですが、その後二人のメンバーが加わってくれ、照明や劇中の動画撮影を担当してくれました。

練習で役者の皆さんが一生懸命台詞を覚えたり、先生の指導を受けたりして頑張っているのを見ると、私も早く撮影の要領を覚えて役者さんにかっこよく撮らなさい、という思いが強くなりました。

本番では他のメディア担当二人も頑張ってくれて、無事に語劇を終えることができて嬉しかったです。次の語劇は卒業生として観に行くのを楽しみにしています！

宮本夏希 (字幕・スケジュール管理/3年)

今回の語劇では、私は演者さんのスケジュール

管理と字幕を担当させていただきました。前回の語劇には参加せず、観客として見ていただけだったので、今年はこうして語劇に関わることができ、何より嬉しかったです。

字幕は自分だけの作業ではなく、演者さんの動きやセリフをしっかり把握しないと務まりません。練習の際には、演者さんの努力を間近で感じ



ながら、字幕の動かし方を考えていました。字幕は観客の皆さんがストーリーの内容を知るための大切なツールなので、当日はとても緊張していました。しかし本番は先生方の支援もあり、大きなトラブルなく無事に終わることができました。語劇を企画してくださった先生方、演者の皆さん、サポート役の方々、観客の皆さんには感謝しています。

舞台に立つことには抵抗があるけれど、語劇に携わりたいと思っている学生には、ぜひスタッフとして参加してほしいと思います。

T. I. (メイク/3年)

私はメイク係として参加しました。役者の演技を引き立たせ、より一層良いものにするという使命感を持って取り組みました。事前にプロのメイクアップアーティストの方に来ていただき、直接テクニックを伝授していただきました。担当した「月」役のメイクは、いわゆるメイクとは違いました。物語の要となる重要な役であり、人間ではない、概念のような存在をメイクでどのように表現するか、役者や監督の先生と相談し、試行錯誤しながら完成形に近づけていきました。役者本人の強い意志や役への想いを反映させることのできた仕上がりだったと自負しています。高校時代の舞台メイクの経験が活かされた貴重な時間でした。「役者に一番近い裏方」として作品に関わりたいと考える人にとってこの上ない機会です。ぜひ参加してみてください。

